

東日本大震災と文化財レスキュー

岩崎 均史

東日本大震災

二〇一一年三月一日に起こった観測史上最大のマグニチュード九・〇という地震は、宮城県沖を震源とし東北太平洋側の各県から北関東及び首都圏を含む関東一帯にまで及ぶ大きな災害をもたらした。そして今回は、直後に太平洋側の東北く北関東各地に一〇メートルを超える大津波が押し寄せ、沿岸の地震被災地に壊滅的な被害を与えた。さらに、津波による福島島の原発の被災は、深刻な原子力事故となり、一層今回の地震による被害を深刻なものとした。ここ二〇年では、阪神淡路大震災・新潟県中越地震などまだ記憶に新しい規模の大きな地震による被害が生じているが、今回の災害は、地震規模の大きさに加え、被害の地域的範囲が広域に及び、津波及び原発の災害などが加わるという、桁外れの悲惨な状況となるまさに未曾有の大災害となった。

この地震の被害を受けた被災地では、多くの文化施設や文化財も壊滅的な被害を受け、その救済も急務ではあったが、被害地各地の行政機関の多くも壊滅的状况であり、そこで働く文化行政の担当者や博物館学芸員も被災者であり、学芸員が今回の地震で亡くなった数も少なくない状況であった。何より、現地では、人命が優先され被災者の救済が最優先であることはいうまでもない。そんな状況の中、三月末には、文化庁が文化財等救援事業いわゆる「文化財レスキュー」事業の実施を発表した。

文化財レスキュー

この文化財レスキュー事業は、被災各地の教育委員会からの支援要請を受けた文化庁が公益法人文化財保護・芸術研究助成財団に協力を要請し、同財団に寄せられた寄付金・義援金をもとに被災文化財救援委員会（東京文化財研究所が事務局）を立ち上げて資金助成を行い、被災地に現地事務局を設置する。これに文化庁からの協力要請を受けた国立博物館や文化財研究所などが属する独立行政法人国立文化財機構を始めとして、さまざまな文化財・美術関係団体（日本博物館協会も含まれる）・被災地各県の教育委員会などが、職員を派遣して行うもので、阪神淡路大震災から、災害ごとに編成され、業務にあたってきたものである。作業に関しては、被災地現地の市町村及び個人からの救援要請を現地本部が受け、整理した上で委員会に報告され、そこから各組織にレスキューの派遣要請が行われる。

事前に各組織にはエントリーシートが配布され、博物館学芸員や研究者個人が、文化財レスキューに参加する意志があるか否か、レスキューに活用される技能的技術などの申告、レスキュー経験などについて記したものが集約され、作業によって招集される。その都度、作業の内容・必要人員・日程・必要とされる技術などが知らされ、都合が合えば、そのレスキュー作業に参加するという形である。各組織は、レスキューに参加する職員に対して、業務命令を持って派遣させる。つまり通常の博物館の仕事と同じ扱い（出張）で、その職員の現地までの交通費・宿泊費・日当等を支弁す

る。また不幸にして事故が生じた場合は当然ながら労災が適用される。文化財レスキューにエントリーし、要請により参加を希望するまでは個人の意志であるが、あくまで各職場から派遣される業務としてレスキュー作業にあたるので、責任も業務として重く、ボランティアとは異なる形態である。当然ながら、通常日々文化財や博物館資料・美術作品などを取り扱い、その知識を持っている学芸員や専門職の者が参加・担当する被災地救援事業なのである。

個人的地震体験

三月一日、あと数分で午後三時になろうかという時、渋谷の職場において、自分自身六〇年弱の人生で最大の地震による大きな揺れを体験し、暫くは自分のブース内の什器の転倒や積み上げた書類が崩れるのを何とか防いでいた。視界には事務所内に置かれたパネル型のテレビがキャビネットの上で、団扇をあおいでいるように左右に大きく揺れ、落下する前に何とかしたいが、揺れがおさまるまでブースから出られなかったのが実情であった。地震もやっとおさまり、何とか倒れなかったテレビの画像からは、東北各地の地震被害と、襲い来る津波の実況が写し出されていた。信じられない被害の様子をただ見つめるのみであった。当日は博物館も開館しており、地震直後すぐに館内における入館者の安全確保にとりかかった。十数名の入館者がおられたが、怪我などはなくひと安心したが、大きな揺れにその場に座り込む人もおられた。精神的なショックは、少なからず存在した。エレベータは非常停止となり、全員をエントランスホールまで誘導し、テレビ等からの情報を提供して待機していただいた。鉄道はすべて運休となったが、館の前を通る路線を含め、バスが運行しはじめ、入館者の方たちも段々と帰路につかれ、館内が職員のみとなった段階で、休館とした。やはり、このような災害時に最優先されることは、入館者の人命の安全確保であり、当日も、エントランスホールで、共に過ごした色々な話などしながら、落ち着いていただき、安全確保の上で帰宅いただいたが、無事

に帰宅されるよう祈らずにはいられなかった。館内も一部揺れの影響で什器が転倒する、照明がずれるなどはあったが、資料等に大きな影響はなく、初期的な安全確保ができ一息ついた。ちなみに、当日私は、徒歩にて横浜の家まで帰った。いわゆる帰宅難民であるが、ところどころの停電はあったものの、それほど苦勞せず四時間ほど後に停電で真っ暗な我が家に無事たどり着いた。途中、遠方に大きな火災が見え、夜空を明るくしていたが、どうやら千葉の石油コンビナートの火災の遠望だったようだ。

翌日から、世の中は三重苦の震災被害が次々に報道され、「国難」と表現されるに異存ない震災によるさまざまな影響が広がっていった。我が家を含むエリアは、計画停電の優等生で、すっかり停電なれしてしまい、むしろ電気が無いなら無いなりの生活や時間の過ごし方を工夫したものである。電気のある生活を基準にすれば不便であることは間違いない。そのまま停電が長く続くなら話は別だが、たかだか数時間なんともなるものであり、被災地を思えば文句はいえない。ただ、今回の首都圏における計画停電は、やむを得ずの実行だったことは理解し、協力したが若干の不公平感は最後まで拭えなかった。

文化財レスキュー事業へのエントリー

やがて、日本博物館協会から文化財レスキューへのエントリーシートが送られてきた。私も含め当館の学芸員有資格者八名中七人がエントリーし、本年中に五名が実際にレスキュー事業に参加している。私は、七月中旬に宮城県でのレスキュー要請に参加してきた。三〇年を超えて博物館で仕事をしてきた人間として、被災地で自分が何かできることはないかと考えれば、文化財レスキューのような、今までの体験や経験で猫の手ながらお手伝いはできるだろうという思いである。被災地では、学芸員の知人などが少なからず苦勞されているわけであり、猫の手・蠅の手の斧であることは承知の上、自然な行動として、エントリーし実際に作業に参加した。

さて、現場の状況であるが、仙台市博物館内に現地本部が置かれ、作業

の調整、スケジュールの確定などの中核業務が行われ、様々な資材が用意されている。作業着・ヘルメット・安全靴・軍手・軍足・防塵マスク・梱包資材・救急用の薬・害虫避けの薬品・消毒用アルコールなど、現場で必要なものはほとんど用意されていて、昼食の他せいぜいタオルや飲料水の用意以外は、参加者は身ひとつで現地入りし、自分の体にあわせて装具を揃えれば良いのである。現地にテントや食料などを持ち込んで作業する自己完結型のボランティアの方に比べると恵まれているが、やはり、文化財レスキューという特殊な業務ゆえの手配であろう。この現地本部経費や諸用品などの用意に義援金が充てられているのである。

この時の作業は、仙台市亘理町の個人宅にある津波被害を受けた蔵からの文化財救出と一次避難場所への搬送（それに伴う簡易な清掃と梱包）が主な業務であった（実際は、三陸方面の作業予定であったが、数日前に変更となった）。今回の業務には、東京と奈良の文化財研究所、東京と九州の国立博物館の職員に日本博物館協会の要員（班長である私以下七名）の文化財レスキューに史料ネットのボランティア、亘理町の教区委員会の職員など総勢三〇名弱が作業にあたった。車両に分乗し、現地入りした。蛇足かもしれないが、日本博物館協会の要員分の車両の手配、運転も自分たちで行なっている（費用のみ事務局が支弁）。亘理町は阿武隈川河口の伊達家縁の町で、海岸線から数キロ陸地にバイパスが仙台空港に至っているがその右と左では、被災から四ヶ月経た段階でも、全く異なる様子を見せていた。現場に向かつてバイパスの左側（海側）には、もうほとんど家は見えず、鉄筋建築以外は基礎を残すばかりで、その他、瓦礫の山と放置された車両など、被害の爪跡をはっきりと見せつけられ、右側は、屋根などにビニールシートが掛けられた家など若干見られるが、農家の人は田畑で働き、商店やコンビニも普通に営業している。バイパスが内陸部の堤防の役目を果たしたようで、天と地の差が一本の道を境に存在していた。車両はバイパスから現地向かって降りると、無残に折れた電柱、店内が空っぽのコンビニ、窓が割れ土砂が堆積した学校などが次々に目に迫る。お盆も近かったことであろうが、家の基礎だけの所に水と花が置かれている痛

ましい状況はそここに認められた。カメラを向けるレスキュー参加者もいたが、私はそのような状況を自分のカメラに収めることに躊躇し、撮影は作業の記録のみに留めた。地震震源地から直線で結ぶと亘理町は最短距離に位置し、相当の揺れがあったという。津波の到達は比較的遅かったが、阿武隈川を遡上し、海岸線からと、堤防を越えて川からの二方向からの津波に飲まれている。現場の目の前が河口の堤で、陸側からは三メートルほどの高さがあり、頂上から河口へは六メートルほど高低差が付けられている。当日のトイレが河口であったので（水道・電気・ガスはまだ復旧していなかった）、しげしげと観察したが、結構な高さであった。一〇メートル以上の津波ということであるから、数字的には六メートルの堤防を越えて押し寄せたのだろうが、軽々と津波が超えてきたという状況を、現実に現場を見ても知らないものには想像もできない。

現場での作業

さて、現場であるE家は、江戸時代から質屋や薬屋などを営む他、手広く商売をした旧家で、二つの大きな蔵を持っていた。いずれも一階部分は完全に津波に襲われている。対象となっている蔵の外壁は一部漆喰が崩落し、数日前までは扉も開けられなかったという。注意としては、いつ余震が起こるか分からない中（前夜も数回地震があった）完全装備（安全靴に



写真1 レスキュー対象の蔵。外壁が崩れている様子や周辺の瓦礫の状況が窺える

ヘルメット・長袖の作業着・防塵マスク着用など）のうえ、津波の入っている階下の物品については、黴以外にどのような微生物が発生して



写真2 蔵の二階での作業。僅かな窓からの光を頼りに、襖を一階に下ろしている

いるか分からないので、素手では絶対に触らないなどが徹底される（水道が復旧していないので、手軽に手を洗うことができない）。電気は復旧していないので蔵の中は暗い、そ



写真3 著者が見つけた津波が押し寄せた時のままの引き出し。これも救出可能であると聞いて一安心

分かる範囲でどのようなものか、扱いはどうすべきかをアドバイスするなども行い、敷地奥の蔵（一〜二階）、表蔵（通りに面した店舗を兼ねた蔵の二階）のE家に伝えられた

して蒸し暑く（日中は、外で三五度前後はあった快晴の日）、臭い上にはこりっぽいという、作業環境としては劣悪の中、現場指揮の東京国立博物館の田沢氏（絵画・彫刻室長・旧知の仲故、私も彼もやりやすかった）の指示の下作業が開始された。同時に幾つかの作業が行われたが、はじめは蔵の二階からの文化財救出作業を行った。江戸後期の生活什器類から近現代のものまで、E家の御家主と町の教育委員会の人があげたりリストをもとに、残りは現場の判断で、運びだすものを選別し、蔵から外に移動した。ある程度外に運び、軽く埃を払ったものから、仕分けの上で梱包する。町の郷土資料館と現場との間を美術品梱包専用車がピストンで移動し、一次避難していくわけである。郷土資料館にもレスキューが待機し、車からおろし、更に清掃の上、仮番号付加のうえで撮影して仮リストを作成し収納場所まで運ぶ作業を分担した（日本博物館協会のレスキュー参加者から女性がこの作業にあたった。何分、現場はトイレも使えない状況で、女性向きな作業現場ではなかった）東北方面の日本通運などの美専車も含め、運搬車両の被災ダメージが甚大で、この美専車も奈良から来ていた。

いんないとも...

E家御当家や教育委員会の人で判断がつかないようなものについては、

生活用品（衣料や調度・装飾品など）更に、別棟の書庫から初版本類（残念ながら大半は津波にやられていたが残したいとすることで搬出）などを運び出した。奥の蔵に開かない引き出しがあるとのこと、手のあいた時に私が少しずつ騙し騙しに引き出しを動かしてみた。少し引き出した瞬間たまった水の揺れる音、発酵しているのか泡音が聞こえたと同時に、マスク越しにもものすごい臭気に襲われた。我慢してさらに開けると、引き出しの中は海水が充滿し、大福帳などの紙類が黒く濁った水の中に認められた。三段の引き出しは、三月一日のまさにタイムカプセルで、その時に入った津波がそのまま残されていたのである。東京文化財研究所の北野氏が駆けつけ、状況を見られて九〇%以上救出できると話されていた。聞く所によれば、このような海水の水没紙製の文化財は、浄水で洗い流し一時乾燥の後、冷凍庫にて暫くの間冷凍保存される。この段階でバクテリアや黴菌などが死滅する。その為に、委員会の要請で、被災地周辺の食品会社などの民間企業の冷凍倉庫を利用する協力を得ているのである。様々な協力体制が文化財を救っていくのだと感心した次第であり、また、授業などで話している和紙の強靭さをまざまざと再度教えられた気がする。水が黒く汚れていたのは、墨が流れたのではなく、一緒に入れてあった新聞紙や古い写真・絵葉書などからインクが滲出したものだとすることで、悪臭もそれが原因だったのかもしれない。



写真4 炎天下の作業。私服で作業しているのは史料ネットのボランティアの方々。後ろが三メートルの堤、反対側に六メートル下って河口がある。それを越えて津波が襲ってきた



写真5 右図でみられる作業場のブルーシートは、倒壊後、片付けられた隣家の基礎の上に敷かれていて、作業が片付くと、コンクリートの基礎が現れる

震災では、およそ一〇〇日以内にその主な業務は終了している。ところが、今回の場合は、宮城県のみで既にそれを超えている。八月以降は作業が岩手県などに移り、津波の被害が大きかった陸前高田などのレスキュー作業も行われた。広い範囲に災害が及んでいる以上、継続が必要なのであろうが、やがて、それもままならなくなるのが今回の現状なのだ。特に原発事故を抱える福島のレスキュー事業は拡大した避難エリアを抱えており、困

さて、この作業は、ある種寄せ集めの混合部隊の感はあるが、いずれも参加者は博物館に勤める者であり、それぞれ専門分野では一家言ある強者揃いで、誠に頼もしい仕事ぶりであった。ただ、当日は脱水症状にはならぬよう、水分の補給に努めたが、汗は尋常でない量をかいていたはずである。炎天下の風通しの悪い蔵の中は蒸し暑く、その中で長袖の作業服マスクにヘルメットで動くことを想像してほしい。タオルは直ぐに汗でびしょりとなったし、防塵マスクは鼻と口の形に外側から汚れていた。

文化財レスキューは、その名の通り被災した文化財や危機に瀕した文化財を救出する作業である。過去の

難な問題を抱えている。実際に、福島県は一部で緊急を要するものが着手されたに過ぎない。未だ立ち入り許されない警戒区域（原発二〇キロ圏内）にも国指定の文化財をはじめ、博物館施設や遺跡があり、救出することもまだできていない。

文化財レスキューは、現在では次第に落ち着きつつある各被災地の学芸員や専門家、地元のボランティアが、それぞれの地元の文化財を救出する活動の支援にシフトしつつもある。一月に参加した同僚は、現地の人達の指示により洗浄作業を行ない、旅費などもレスキュー事業サイドで支給されたという。彼の作業内容からも、現在は、既に救出した文化財の保存体制を整えることなども作業に含まれてきており、清掃・洗浄や補修など、力仕事から繊細さが求められるようになってきているようだ。劣悪な環境とは異なり、女性も参加しやすくなってきたのではないだろうか。

結びにかえて

今回の震災で、国指定の文化財の被害は七〇〇件をこえているという。そのすべてが救出されていない現状もある。開始早々は、華々しくマスクにも報道されたが、次第にレスキューの現状は敢えて調べなければ、目にするには少なくなっている。聞く所によれば、文化財の緊急防災対策、復旧、被災ミュージアムの再興などの予算もある程度は閣議で目処が付いたようだが、全てをまかなえる額ではなく、未だ民間支援も必要とのことである。また、二〇一二年度の文化財レスキュー事業継続も正式に決まったという。文化行政は不要不急などといわれるが、地味な業務ながらこのような文化財レスキューなどに関しては、決して其の範疇に入るものではないと思う。もちろん全体的な文化行政へのまなざしは見直されるべき事項であるが、時を逸すれば失われてしまうかも知れない脆弱な文化財を救出する・守るという発想は、人命・ライフラインについて考慮すべき課題であることを改めて確認できたことは、自分自身にとって良い機会だったと思っている。そして、学習院大学では、学部二年次開講の博物館学概

論にて、後期開講時に報告の形で、「博物館と災害」といった講義を行った。その時は、特に感想めいたことは聞かれなかった。しかし、後日「講義を聞いて、自分も被災地で何かお手伝いがしたくなった」「ボランティアに参加したい」などの声が聞こえてきて、最終講義段階では、実際に参加してきたとか、継続中という学生の報告が聞けた。「講義が背中を押してくれました」といった報告に、「縁」とか「絆」というようなものを深く感じた次第である。

最後に、今回の震災で犠牲となり、尊い命を失われた皆様の冥福をお祈りいたします。合掌。